

国語科の主張

1 教科で育みたい人間像

言葉には世界を変える力がある。友達の一言に勇気をもったり、文章を読んで涙を流したり、自分の言葉が誰かの心の支えになったりすることもある。さらには、昔から語り継がれる文章や言葉が、時代を超えて私たちの胸を打つこともある。人と人がつながるために生まれた言葉には、人の心を動かし、行動さえも変えてしまうような力があるのだ。だからこそ、人は他者とわかり合える言葉に昇華させていきたいと思うのではないだろうか。

現代ではネットワークの進歩によって自分の思いを、より簡単に、より速く、より広く伝播できるようになった。寝る前に何気なく SNS 上に書き込んだ自分の言葉が、朝になって自分の予想をはるかに超えた人たちに影響を与えていることも珍しくない。同じ言葉を投げかけるにしても、これまで以上に自分が発する言葉を見つめ直すことが求められるようになった。自分の思いをありのままに発する前に、誰に・何のために・どの言葉を用いるのかを思い描くことは、他者の心に思いを届け、互いにわかり合えるきっかけとなるだろう。

このように一歩立ち止まって自分の言葉を見つめ直し、自分の思いが伝わるためにはどうしたらいいかを考え、言葉を吟味していくことは、言葉自体の価値に目を向け言葉を大切に思いを表現していると言えるだろう。このような経験を重ねることで、私たちの人生は彩り深いものになっていくのではないだろうか。

以上のことから、子どもたちには「言葉を大切に、自らの思いを表現していく人」に成長してほしいと願っている。

2 教科で願う子どもの学び

私たち国語科が願う子どもの学びとは、「題材に描かれた価値や人々の生き方、考え方に対して自分なりの考えをもつことや、それを他者と交流することで自らの考えを深め、言語感覚を磨くこと」である。

例えば、小説を読む際には、情景描写や人物描写、象徴表現や比喩表現、語り手の視点や対比、段落構成といった技法を活用して読み深めていく。さらに、それらを結びつけることによって作品の主題にせまったり、作品においてその言葉が意味することをとらえたりしていく。その過程で子どもたちは他者の言葉を適切に受けとるために、用いられている言葉の意味を考えたり、多くの情報を様々な視点からとらえ直したりしていくこともある。

また、自分の考えを発信するときには、自分の思いや考えをより正しく他者に伝えるために、相手意識をもった上で言葉を用いようとする。さらには、言葉にふれて抱いた思いを他者と伝え合うことで、自分の考えを深め、価値観を広げていくこともある。

このように言葉を吟味している子どもの姿は、言語感覚を磨いている姿だと言えるだろう。

そのために、私たちは作品や教材と子どもたちをつなぎ、言葉の世界に没頭できるような題材構想を大切にしている。題材の魅力にふれた子どもたちは、自らの疑問から問いを生み出し、その問いの解決に向けて追求にのめり込んでいく。そして、その問いを解決する過程で見いだしたことや、新たに抱いた疑問などを他者にも伝えたい。他者に伝える際には、自分の根拠としたことや、説明するために有効な非言語情報（図やグラフ、動画などの参考資料など）を活用して説明をしたり、言語情報だけで自分の意図することを相手に届けるために言葉選びにこだわったりする。

このように子どもたちは自らの思いを相手に届けるために、言葉にこだわり続ける学びを重ねることで、言語感覚を涵養していくのである。

私たち国語科は、子どもたちが言葉の世界に浸る営みを繰り返すことで、思いや考えを他者とわかり合えることの喜びを味わいながら、豊かな言語感覚を磨いていくことを願っている。

社会科の主張

1 教科で育みたい人間像

社会科では、単に社会に適応して生きる人ではなく、よりよい社会のあり方を追求し続ける「社会に参画し、創り続ける人」を育みたいと考えている。私たちは、社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」と考える。「社会」とは、家族や地域、国家、世界など、何らかのつながりをもった人々の集まりであり、「社会的事象」とは、社会における現在や過去の人々の営みのことを指す。

先人達はある社会的事象に出会ったとき、空間的、時間的な視点から捉え、そのよさや問題点、またはそれに携わる様々な人々の考えを吟味しながら、よりよい社会のあり方を追求し続けてきた。その積み重ねが今の社会の姿を形づくっている。私たちが生きる時代は、SDGsの広がりやAI時代の到来など、人々の生活や社会が急速に変化する中で、新たな価値観がうまれるなど、予測困難な時代を迎えている。さらに、多様性を認め合う動きがある一方で、価値観の違いや利害関係による対立が表面化し、合意を導き出すことが難しい状況も見られる。そのような状況であっても、未来に期待を抱き、よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくために、自己の立場や状況を意識するだけでなく、他者が重視することやその人が置かれた立場を理解したうえで、すべての人々にとって最善の結論を導き、実現を目指し行動しようとするのが大切だと考える。

2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、課題解決に向けて、根拠に基づいた自分なりの考えを、よりよい社会の構築に向けて発展させていくことである。子どもたちはある社会的事象に出会ったときに、「解き明かしてみたい」「これはみんなで考える価値がありそうだ」「なぜだろう。おかしいのではないか」などといった思いから、全員で共有する問いが生まれ、社会的事象を追求していく。子どもたちが社会的事象を追求していく過程で「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目してとらえ、比較、分類したり統合したり、地域の人々や国民の生活と結びつけたりしながら考察して、自分なりの考えをもっていく。自分なりの考えを語り合う中で、現実の社会とのつながりを感じ、社会的事象の矛盾や現実とのギャップに着目したり、他者の異なる考えや価値観に出会ったりして、自分の考えを発展させていく。私たちは、このような学びが子どもたちの中で生まれることを願っている。

私たちが願う学びを実現するためには、授業の中で「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善の社会のあり方』を創りあげていく営み」を巻き起こしていくことが必要だと考える。そのような営みには、多様な他者の存在が必要不可欠である。自らの考えをより深めたり、広げたりするために、多様な他者とかかわり、語り合い、考察することが重要である。かかわり、語り合うことで自分だけでは気づくことができなかつた視点からとらえたり、異なる立場に立って考えたりすることで、公正な判断や、より合理的な結論を導くことができる。その過程で対立や解釈のズレが生じたときにこそ、考えの根拠や互いの価値観について語り合い、相手の見方や考え方に対する理解を深め、互いが納得できる社会の姿を見いだしたり、新たな社会の姿を創りあげたりするだろう。

数学科の主張

1 教科で育みたい人間像

数学と人間が出会ってからというもの、社会の発展とともに数学は発展してきた。先人たちは基盤となる公理や定義を用いて法則や定理を生み出し、それらを利用して新たな法則や定理を次々と生み出すことで今日の数学を創りあげてきた。

数学を創る過程に必要なのは明確な根拠が並べられた矛盾のない論理である。また、多くの人がある時代におけるものやコトを何度も問い直すことで、新たなものやコトが創りだされてきた。それは、世界中の人が納得する客観的なものでなくてはならない。例えば農耕を効率的に行うために自然の事物現象を考察し、暦や天文学を創りだしたことがそれにあたるだろう。他にも土地を正確に測量したり、商売の取引やそれに伴う計算を考えたりするなど基準の必要性から、さらに数学は発展していった。近年では不確実な事象に関する膨大なデータから統計的に考察したり判断したりする場面が増えたように数学が担う役割は広がりを見せている。つまり、数学の発展は社会の発展とも言える。その発展のきっかけとなるのは、自分たちの生活をよりよくしようとする人々の思いである。数学を道具として、言語として、そして考察の対象として捉えていくことで新たなものを生み出していくことができるだろう。

これらのことをふまえ、私たち数学科は新たなものを創り出そうとするために「論理的かつ客観的に解決にあたる人」を育てていきたい。

2 願う子どもの学び

私たち数学科は、願う子どもの学びを「数や図形、統計、関数の概念を再構築していくこと」と捉えている。

授業の中で、子どもたちが疑問を抱き、事象を数理的に捉え、解決する過程において、見当をつけたり、数学的な表現による根拠を明確にした考えをもち、それらを結び付けたりすることがある。例えば、子どもたちは「桜の開花予想」の題材において、データを関数的・統計的に考察することで、既習である比例・反比例から1次関数を見い出したり、2数の伴って変わる数を考察するときは、統計的な考えと関連づけて、関数的に考察する良さを見い出したりすることがあるだろう。このように、数や図形、統計、関数の概念を拡張したり、統合したり（関連づけたり）させながら再構築していくことができると考える。このような過程を通して、子どもたちは新たな疑問を抱いたり、身の回りの数理事象に目を向けたりするなど、さらなる学びの過程を生み出していくだろう。新たな過程を生み出す子どもたちには、様々な学びの原動力が育まれているはずである。

数学科が願う子どもの学びを実現していく過程

対話・
試行
錯誤

- ⇔ 様々な事象を数理的に捉え、疑問を抱く（課題・前提条件）
- ⇔ 見当をつける（予想・条件付け・仮説を立てる）
- ⇔ 数学的な表現（言葉や式、図、表、グラフ）による「根拠を明確にした考え」をもち、それらを結びつけていくことで、性質やきまりをみつけ、筋道立てて説明していく
- ⇔ 数や図形、統計、関数の概念を拡張したり、統合したり（関連づけたり）させていく
⇒新たな疑問がさらなる過程を生み出す

その時代における正解の無い問いに対して追究する姿勢は今も昔も変わりはない。だからこそ、様々な事象に対して疑問を抱き、何度も問い直し、他者と多様な考えを重ね合わせていくことが大切なのである。数学は今もなお発展し続けており、その数学を創る過程に数学を学ぶおもしろさがある。

これらの学びを積み重ねていくことは、新たなものを創り出そうとするために「論理的かつ客観的に解決にあたる人」を育てることに寄与すると私たち数学科は考える。

理科の主張

1 教科で育みたい人間像

私たちは理科を通して、「科学のまなざし」をもつ人を育みたいと考えている。「科学のまなざし」とは「自然の事物・現象をよく見つめ、そこから見えないものをとらえようとする感覚」のことである。見えないものには自然の事物・現象の本質と、自然に対する自分自身の感性の二つがある。したがって、「科学のまなざし」をもつ人とは、自然の事物・現象の本質を知り、自然に対して感動したり、畏敬の念を抱いたりするような豊かな心をもつ人と言い換えることもできる。つまり私たちは、理科でこそ育める「知性」と「情操」を子どもたちに育みたいと考えているのである。

「科学のまなざし」をもった子どもたちは、身の回りにあふれる自然の事物・現象から様々な「知性」と「情操」を涵養し、人生を豊かにすることができるだろう。「知性」と「情操」を深めた子どもは、自らを取り巻く自然環境や社会に対して、客観的な根拠や事実に基づいた議論を重ね、道徳的な価値判断をすることができるようになるだろう。それは、自然や社会との共生が必要な未来を生きるために必要な資質・能力でもある。子どもたちが理科を通して、「科学のまなざし」をもち、自らの人生を豊かにしていく人になることを私たちは願っている。

2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、「自然の事物・現象から探究心を高めたり、自然の事物・現象のとらえ方を発展・深化させたりすること」である。子どもたちは自然の事物・現象に向き合ったときに、不思議に思う気持ちが自然と湧き起こる。この気持ちを足がかりに、自然の本質を見出そうとする気持ちが探究心である。この探究心を原動力にして、子どもたちは今までもっていた自然に対する概念や認識の仕方を広げたり、深めたりしていく。逆に、自然の事物・現象のとらえ方の発展・深化によって、子どもたちは達成感や満足感を得ると同時に新たな疑問をもち、さらに探究心を高めていく。私たちは授業を通して、このような相互作用的な働きである、探究心の高まりと自然の事物・現象のとらえ方の発展・深化という学びを、子どもたちに育んでほしいと願っている。

私たちはそのような学びの実現のためには、実証性・再現性・客観性の三つの視点に基づく、仲間との「科学的対話」が欠かせないと考えている。

理科の授業で子どもたちが試行錯誤する際、そのよりどころとなるものは実証性・再現性・客観性の三つの視点である。言い換えれば、この三つの視点に基づく試行錯誤こそ、他教科にはない理科の特徴でもある。

実証性	観察・実験の結果が考えを裏付けるものであること
再現性	同一条件下において観察・実験を繰り返し行ったり、他の仲間が行ったりしても同様の結果が得られること
客観性	異なる観察・実験であっても共通している部分があったり、疑いのようなない事実であったりすること

三つの視点にこだわりながら自然の事物・現象に向き合うことは、自分の考えが誰にとっても納得のできる妥当なものであるのか、矛盾のない説明になっているのかを子どもたち同士で確かめるきっかけとなり、自分の考えをよりよいものにしていくことにつながると考えている。そのとき子どもたちは、お互いの疑問を出し合うことで問いを共有したり、観察・実験の結果を吟味し考察したりする必要性を感じ、「科学的対話」を生み出していくだろう。

「自然の事物・現象から探究心を高めたり、自然の事物・現象のとらえ方を発展・深化させたりすること」を重ねながら、子どもたちは「科学のまなざし」を育てていこう。このようにして私たちは、理科の授業だからこそ育むことのできる子どもの学びの実現をめざしたいと考えている。

音楽科の主張

1 教科で育みたい人間像

音や音楽には、人々の心を動かし、豊かにしていく力がある。音楽は古くから儀式や祭りなど、歴史や人々の生活とともに存在しており、様々な音楽のジャンルが互いに影響しあい発展してきた。歴史や文化的背景をもつクラシック音楽や、世界各地の伝統的な音楽、新しく生み出されるポピュラー音楽など様々なものがありそのどれもが固有の価値をもって存在している。そのような音楽の価値を感じ、受け止めようとすることで感性がより磨かれ、音楽そのものの価値を尊重することにつながっていく。このように多様な音楽の価値を尊重する姿勢は、時代や思想を越えて人々の思いに寄り添い共感するということであり、音楽を通して自他を尊重する心豊かな人を育むことができるだろう。

さらに、現代においても音楽の発展や広がりには限りがなく、好きな歌手や自分が気に入った音楽をオンライン配信等で気軽に選び、楽しむことのできる時代となった。自らの生活に音楽を取り入れ、音楽を聴いたり演奏したりする人は、多くの人と同じ時を共有し、その時々感情を共有することで時として言葉で表現できないほどの感動的な体験をすることができる。自ら音楽とかかわろうとすることで音楽による感動を味わい、音や音楽を自分にとってかけがえのないものだと感じるようになるだろう。このような人は音楽を愉しんでいる人といえるのではないか。

私たちは音楽科を通して、「自ら音楽を愉しむ、心豊かな人」を育みたいと考えている。

2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと」である。子どもたちは様々な文化的・歴史的背景の中で醸成された音楽にふれたり、自分がつくった音楽を仲間と聴き合ったりする体験を通して、音楽の価値や美しさを感じ、音楽には多様な受け止め方や良さがあることに気づいていく。音や音楽は目に見えず、時間とともに消えてしまう瞬間の芸術であるからこそ子どもたちは、感性を豊かに働かせながら音や音楽と向き合っていくのである。このような過程を通して、子どもたちは音楽に対する考え方を広げたり、深めたりしていただくだろう。

音や音楽は、「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化など」との関わりの中で、人間にとって意味あるものとして存在している。授業を通して、世の中にある音や音楽と出会い、様々な音楽がもつ固有の価値を尊重し、その多様性を理解できるように学びを展開していきたい。そのためには、音楽を「つくる人」「演奏する人」「聴く人」といった立場を体験することが、音楽との理想的なかかわり方であると考える。子どもたちの「自分も取り組んでみようかな」「頑張ればできそう」という思いを大切に、音楽経験の異なる子どもたち全員が、ためらうことなく心を解放して積極的に音楽活動に取り組むことのできる雰囲気をつくっていきたい。願う子どもの学びを実現していくために、音楽科では、題材のもつ価値を吟味し、子どもが「何でこうなるのだろう」「以前学習した曲と似ている部分がある」「この曲は今までと違う雰囲気があるぞ」などの、音楽への思いが生まれるような題材選定を行いたい。

題材との出会いを通して、中学生の今しか感じることでないみずみずしい感覚で音楽を経験することができるはずである。仲間との様々な音楽の経験を通して音楽文化に幅広く親しみ、人生を豊かに歩むことができる子どもを育みたいと考えている。「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと」を通して、中学校の音楽の授業だからこそ育むことのできる、子どもの学びを実現させていきたい。

美術科の主張

1 教科で育みたい人間像

美術科では、「感性豊かに創造していく人」を育みたいと考えている。「感性」とよく似たもので「感受性」という言葉がある。この2つはしばしば同じような意味で使われるが、日本語大辞典（講談社）によると「感受性」は「外界の刺激を印象として心に感じ取る能力」、「感性」は「心理学で外界の刺激を受けてそれに対応する感覚内容をまとめる働き。哲学で悟性ととも認識能力を形づくる心の働き」とある。「感受性」は「感覚」の意を含み、「感性」は「理性、判断」の意を含んでいることがわかる。つまり、人やもの、出来事、作品、景色などに出会って、何事かを感じ取る（input）ことにとどまらず、それを理性が咀嚼し、何らかの形で表現（output）することで、初めて豊かに感性が働いていると言えるのである。

感性は、大人が未熟な子どもに教えて身につけさせるようなものではない。例えば、小さな子どもは、身の回りのさまざまな刺激を敏感に感じ取り、「うわあ、きれいな夕焼け空だなあ」「ねえ、見て見て、すごーい！」などと声を上げながら豊かな表情を見せる。そうしたときに、隣にいる大人は表情一つ変えずスマートフォンの画面を見つめていたりする。そのような様子を目にしたとき、大人よりも子どもの方が豊かな感性をもっているのではないかという気持ちになる。年齢を重ね、大人になるにつれて、幼い頃は見えていたものが見えなくなり、感じられていたことが感じられなくなってしまうのだろうか。美術科では、生まれつきもっている感性を眠らせることなく、さまざまな経験を経て成熟した理性により豊かに深められていく人を育みたいと考えている。子どもたちには、美しい夕焼け空を前にしたとき、心を動かし、その感動を絵手紙にして誰かに送ったり、隣にいる人に「あのグラデーションがとても綺麗だね」と言葉で伝えたり、一瞬の色合いをスマートフォンのカメラに収めたりするなど、感じ取ったことを自分なりに表現して誰かと共有できる大人になってほしい。そのような人の人生は、きっと彩りのある豊かなものになるだろう。

昨日までの常識や価値観が一瞬にして変わってしまう世の中を私たちは生きている。最新の高性能 AI が、どれだけ膨大なデータを学習、分析しようとも、所詮は過去のデータから導き出された最適解であり、新たに生み出されたものではない。過去の常識を越え、今はない新しいものやことを創造できるのは、感性を備えた人間だけである。

子どもたちには、感性を豊かに働かせ、発想したり表現したりしながら、自分で未来を創造できる人間になってほしい。そして幸せな人生を送ってほしいと願っている。

2 教科で願う子どもの学び

ほとんどの子どもたちは、プロの画家やデザイナーを目指しているわけではない。言うまでもないが、義務教育の美術の授業の目的は、美術の専門家を育むことではない。そもそも子どもたちは、豊かな存在であるという前提に立ち、教師は「教える」存在ではなく、世の中にある造形的な営みを教室にもち込み、「気づきのきっかけを提供する」存在というスタンスでありたい。造形的な視点をもって試行錯誤をしながら表現をしたり、鑑賞をしたりする活動の過程で、子どもたちは多くの気づきを得るだろう。「筆をこのように使うことで自分の出したい感じが出せるのか、次はこうしてみたらどうなるだろう」「当たり前の日常の中に美術やデザインは存在しているんだ。いつもと街の見え方が変わった」など、様々な気づきを得ながら input と output を繰り返す中で、今まで自分の中になかった新たな意味や価値を見いだしていく。ここで言う「新たな意味や価値」とは、今まで自分の中になかった色や形に関する造形的な見方や考え方、そして新たに見つけた自分や他人の個性やよさのことである。そのため、子どもたちが作品という結果のみにこだわるのではなく、活動の過程や自身の変容などに意識を向けられるような題材構想を心がけたい。

目の前の作品から子どもたちの意識が自分自身に向き、発想豊かに創造する喜びを実感できたとき、子どもたちにとって美術科の学びが生涯にわたって学び続けようと思える価値のあるものになるのではないかと考えた。以上のことから、美術科で願う子どもの学びを「感性を豊かに働かせながら試行錯誤や対話を繰り返し、造形的な気づきを重ね、新たな意味や価値を見いだすこと」とした。願う子どもの姿を常に頭に思い浮かべながら、授業改善に努めていきたい。

保健体育科の主張

1 教科で育みたい人間像

保健体育科では、「心や体と対話できる人」を育みたいと考えている。心や体と対話するためには、心と体を一体として捉えることができる感覚を養うことが必要である。2021年に開催された東京オリンピックでは、日本は過去最多のメダルを獲得し多くのアスリートの活躍を目にすることができた。重要な場面で、力を発揮するためには心の力がかかせないものとなってくる。これは、メンタルトレーニングが広く取り入れられ、科学的にも証明されていることからいえることだろう。

精神的に悩んでいると体にも変調が起きたり、体を動かすことで気分が晴れたりする経験は、誰にもあるだろう。けれど、心と体が相互に影響を与え合っていることを、全員が実感しているとはいえないのではないだろうか。だからこそ、心と体を一体として捉える感覚を養うことが大切になる。このように心と体を一体として捉えることができる人は、心と体の状態を整え、バランスをとり、様々なことに挑戦する中で自身の成長を味わいながら人生を豊かなものにしていけるだろう。

心や体と対話できる人は、運動やスポーツが自らの人生を明るく豊かにし、生涯にわたって親しむ価値があると考えていくことができるだろう。そして、その一端を担うことが、運動やスポーツの本来の目的であろう。しかし、現実には、その本来の目的から外れ、過度のトレーニングによる健康被害やバーンアウト（燃え尽き症候群）から運動やスポーツを辞めてしまうといったケースが生まれてしまっている。子どもたちには、心と体を一体として捉える感覚を身に付け、これまでとは違った視点に立ち、心と体の状態を正しく把握し、ベストな判断ができるように自らの心や体と対話し続けてくことを願っている。

2 教科で願う子どもの学び

保健体育科で願う子どもの学びは「健康や運動についての見方を増やし、自らの体験と結びつけながら、新たな可能性を見いだすこと」と捉えている。子どもたちは、健康や運動に対する様々な事象に対して、「どうしたらよいだろう。」という思いを抱きながら、自ら問いを立て思考と体現を繰り返していく。その中で、新たな視点に立った子どもたちは、事象に対して「なぜ。なんで。」という疑問を抱き、問い直し、これまでの体験と思考を結びつけながら、心と体の状態を見いだしていくことができるだろう。このような学びの中で、子どもたちは、健康や運動に関する原則や概念を理解し、深めながら、体現しようとしていくだろう。

保健分野では、健康に関する問いをもてるような学びを大事にしていきたい。なぜなら、現代において、健康に関する問題は多岐にわたり、複雑に絡み合いながら社会情勢とともに変化している。そのためこのような時代を生きる子どもたちにとって、自分の健康課題を解決する能力はますます欠かせないものになっていくからである。保健分野の授業で、子どもたちはこれまで知っていて当たり前だと思っていた事象に対して、問い直すことを通して、知っているつもりでも実は上手く説明ができないことに気づいたり、新たな発見をしたりするだろう。そのような授業を進めることで、子どもたちは、健康に関する原則や概念を深め、心が体に与える影響について捉え直していくだろう。

体育分野では、運動の原則や概念に迫るための問いをもつことが重要であると考え。しかし、従来の体育の授業では、運動の行い方や上達方法、コツといったことに着目して学んできた。そのような学びでは、運動の原則や概念に迫るための問いをもつことは難しく、運動の原則や概念の深まりまで思考することが困難であった。また、技能による差も生まれやすく、子どもたちは運動に親しむ価値を見いだすことも困難になっている。本校では、子どもたちが自ら問いを立てることを大切にしていきたい。問いに対し、これまでの経験を基に様々な視点から仮説を立てた子どもたちは、仮説を証明するために必要な条件を整え検証を行い、考察につなげていくと考える。このような過程を通して、問いに対して、根拠をもった自分なりの答えに迫っていくことに違いない。そのように運動についての見方が増えることで、運動の原則や概念が深まり、体が心に与える影響についても捉え直していけると考えている。

保健体育科では、子どもたちが、健康や安全に関する事象や運動種目を通して原則や概念に迫る学びを積み重ねることによって、これまでなかった新たな見方とこれまでの体験を結びつけ、新たな可能性を見いだしていく姿を願っている。そして、そのような経験を重ねた子どもたちは、心と体のつながりを実感することができる人になっていくだろう。

技術・家庭科（技術分野）の主張

1 教科で育みたい人間像

今、私たちの身の回りには、ありとあらゆる技術が溢れている。一人一台のスマートフォンをもち、気軽にコミュニケーションを図れるのはもちろん、自宅にいながら買い物ができたり、雨の降る時間帯を分単位で正確に把握できたりと、私たちの生活は年々便利になっている。また、未来社会（society5.0）では、IoTで人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有されていく。さらに、人工知能（AI）によって情報を製品自体が取捨選択し、必要な情報が必要なタイミングで提供されるようになる。このように、技術は今後もさらに加速して発展するであろう。しかし、その便利さが複雑な世界をもたらした。高機能の製品を求めるあまり、必要以上に価格が高騰してしまったり、便利なものが増えていく裏で、自然環境が破壊されていたりする現実がある。

そこで技術・家庭科（技術分野）では、「技術を適切に分析し活用しながら、よりよい生活を営む人」を育みたいと考えている。技術を活用する人というのは、優れた技術を自分の生活に取り入れようとする人である。だがそれだけではなく、技術を適切に分析すること、すなわち技術の本当の価値や本質を見極めることがよりよい生活を営むためには大切なのではないだろうか。生活スタイルや経済状況が変化する中で、今の自分に見合ったものを適切に選択し生活に取り入れれたり、持続可能な社会を築いていくために、自然環境や社会問題にも目を向け、未来の為になる選択をしたりしていくことも必要になるだろう。

また、技術が複雑化した現代においてその価値や本質を見極めるためには、技術を多様な視点から見つめる必要があると考える。洗濯機を例に挙げてみても、衣類の汚れをセンサで感知して洗い方を変えるような機能性だけでなく、インテリアの一部になるような意匠性、運転時に誤ってふたが開かないようにするロック機能のような安全性など、技術を様々な視点から見つめ、異なる条件や立場から技術をとらえ直していくことで、よりよいものを追求しているのである。部品の材料を一つ選ぶ際も、耐久性やコスト、環境への負荷等を考慮するためにプロトタイプをつくり試験を繰り返しながら、そのバランスをうまくとれる最適なものを選択しているだろう。このように、技術を適切に分析することは、技術を多面的、多角的に見つめることからはじまると考える。変化が目まぐるしい世の中でも、自分で技術を分析し活用することで、よりよい生活を創造できるようになることを望んでいる。

2 教科で願う子どもの学び

技術・家庭科（技術分野）では、自らの生活をよりよくしたり、身近な生活の諸問題を解決したりするための方策を構想し、設計、製作、評価という技術的に問題解決を図るサイクルを経験する。この一連のサイクルのあらゆる場面で試行錯誤を繰り返しながら「技術を多様な視点で見つめ、最適解を求めること」が願う子どもの学びである。

多様な視点から技術を見つめるためには、仲間とのかかわり合いの中で、自分にはなかった視点に気づくことが必要である。そのため、製作においても単なる個人作業にならないよう、設計段階で考えたものを見せ合って吟味する活動や、つまづいた点を共有する時間、また、協力して作業を行い互いに評価し合うことで、自分にはなかった視点に気づく機会を与えていきたい。

また、自分にはなかった視点に気づいた子どもたちは、再び自分と向き合い試行錯誤を始める。そのようなアイデアを検証しながら最適解を求める過程にこそ、学びがあると考えている。気づいた視点を効果的に活用し、よりよいものに改善していく時間を十分に確保することで、子どもたちの学びの姿を見とっていきたい。

技術・家庭科（家庭分野）の主張

1 教科で育みたい人間像

技術・家庭科（家庭分野）では「生涯にわたって豊かな意思に基づいて生活を選択する人」を育みたいと考えている。「豊かな意思」とは、昔から伝わる生活の知恵を積極的に活用したり、世の中にあふれる生活に関する情報を収集したり、思いや考えのことである。このような意思で、現状に合わせながら生活を選択していく人、つまり、生活する主体者として、現在の自分の生活と照らし合わせながら、常にその時の最善を選択できる人であると考えている。

私たちにとって、食べる、着る、住む、買うという行動は習慣であり、生活を形成しているものであると言える。私たちは、習慣となっていることを意識せずに行うことがある。人によって家庭環境はもちろんのこと、生活経験も生活の中の優先順位や求めているものが異なる。自分の生活環境や置かれた立場が変化したり、生活経験を積み重ねたりしていくことによって、これまで何気なく行ってきたことにも目を向けることができるようになる。そこから、「もっとこうしていきたい」、「もう少しよりよくできるのではないか」「改善の必要がある」など、生活に対する思いや課題意識が生まれ、価値観が変わってくることもあるだろう。生活は常に変わっていくものであり、自分の意思で豊かな意思を選択していくことに終わりはないと言える。変化の激しい社会の中でも、生涯にわたって豊かな意思に基づいて生活を選択できる人であってほしいと願っている。

2 教科で願う子どもの学び

技術・家庭科（家庭分野）で願う子どもの学びは、「普段の生活と多様な価値観を照らし合わせながら自分の生活に合った意思決定をすること」である。意思決定とは、習慣となっていることを自分事として、現在や未来の自分の心構えや行動について考えることである。生活の中の一場面に置かれた自分の状況を想定して意思決定することは、豊かな意思に基づいて生活することにつながると考えている。

子どもが意思決定をするまでの過程では、まず自分の生活を見直すことを大切にしている。自分にとって当たり前のことが他者にとっては当たり前とは限らない。現状でそれほど不自由を感じることなく、課題だと思ふことなく過ごしていることもある。そこで自分の当たり前を見直すことで新たな気づきや疑問をもつようになる。それらを共有することで、自分の知らなかった価値観を知り、見えなかった部分に気づかされ、より詳しく知りたいと考える。例えば、短時間でできる栄養バランスの良いメニューはどういったものがあるか、食品の保存は、どんな物も冷蔵庫や冷凍庫にしまえば大丈夫だと思っていたが、食材に合わせた保存の仕方があることなど、生活の中での当たり前から自分の生活に合った選択をする姿もあるだろう。このように、健康や環境について、この先の未来に与える影響、人とのかかわりなどの視点から生活を選択することにより、生活に対する視野を広げられ、自分の生活で大切にすべきところを考える点が見えてくるだろう。さらに、実践的・体験的な活動を通して解決策を検証し、効果の実感や想定していなかった問題点に直面することもあると同時に、「前よりは少し良くなった」「他にも自分ができることができそうだ」という思いをもつことができるだろう。こういった過程を繰り返すことによって、生活に対する思いや課題意識をもち、新たな課題を解決しようとしていく姿につながると思う。

複数の題材の配列も考えながら、授業づくりをする中で、私たちの生活は、多くの人や多くのものが関わり合って成り立っており、子どもたちがそれぞれのつながりを意識して考えていく姿を目指していきたい。

「現在の生活と照らし合わせながら自分の生活に合った意思決定をすること」を繰り返していくことによって、子どもたちは「生涯にわたって豊かな意思に基づいて生活を選択する人」になっていくだろう。このようにして、私たちは、家庭科の授業だからこそ育むことのできる子どもの学びの実現を目指したいと考えている。

英語科の主張

1 教科で育みたい人間像

英語科では「世界の人々とつながる人」を育みたいと考えている。「世界の人々とつながる人」の土台となるのは「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」である。

「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」をもつ人は、言語や知識のみに頼らず、相手の文化や価値観に配慮しながら、相手の思いをわかろうとしたり、自分の思いをわかってもらおうとしたりすることができる。また、「自他共に大切にできる人間力」をもつ人は、異なる文化や価値観、思いをもつ人を受容し、相手が誰であろうと、話題が何であろうと主体的にかかわろうとすることができる。また、自分の思いや考えを伝えることに価値を見だし、言語的・心理的な困難がある中でも、粘り強くコミュニケーションを図ろうとすることができる。と考える。

「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」を土台に、「世界の人々とつながる人」は、自分にとって未知な世界や文化、人々との出会いを肯定的に受けとめ、他者とかわりながら自分の世界を広げることができると私たちは考えている。子どもたちが、多様な他者と豊かな人間関係を築きながら、多様な価値の中で共存し、よりよい世界を創っていくことを願っている。

2 教科で願う子どもの学び

英語科が願う子どもの学びとは、「自分とは異なる思いや価値観をもつ相手と英語でのコミュニケーションを繰り返す中で、自分の思いを『わかってもらおう』とすることと、相手の思いを『わかろう』とすることを大切に、『よりよいコミュニケーション』にせまること」である。自分の思いをわかってもらおうとしたり、相手の思いをわかろうとしたりするためには、互いへの配慮や、粘り強く伝えようとする、相手の意図をくみとろうとしたりする意思がないと成り立たない。話し手は、自分の言いたいことを理解してもらうために、より伝わりやすい表現を探したり、より内容にあった表情やジェスチャーで補ったりする。聞き手は、相手が伝えようとしていることを的確に理解するために、質問をして相手の思いを引き出したり、相づちを打つことで自分が理解しているかどうかを伝えたりする。互いに支え合いながらのコミュニケーションを実感することは、「伝わった」「わかった」という達成感や充実感につながり、さらなるコミュニケーションへの足掛かりとなる。また、その体験を積み重ねた子どもたちは知識(knowledge)・態度(attitude)・技能(skill)を有機的に結びつけながら、言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーションを楽しんでいくことができる。また、多様な人々や異文化に関心をもち、積極的にかかわろうとすることで、世界の人々とつながっていく。このような学びを実現するために、私たち英語科は、子どもたちが、多様な他者と様々な話題や状況、場面において、互いにわかり合おうとしながら英語を用いてコミュニケーションを繰り返せるような題材選定を大切にしたい。感情を揺さぶる題材は、伝えたい・知りたいという子どもたちのコミュニケーション意欲をかき立てる。また、目的をもって思いや考えを伝え合う場面を題材構想の中で意図的に設定することは、子どもたちが目的を果たすために言葉を主体的に選択しながら自らの思いを伝えようとする、相手の真意を推し測ろうとする。ことにつながる。「伝わった」「わかった」という経験や、「伝えられなかった」「わからなかった」という経験を積み重ねていくことで、さらなるコミュニケーションへの意欲や自信を得たり、多様な語彙使用の必要性を実感し、英語表現を主体的に身につけようとする、相手の思いをくみながら対話をしようとする。ことを期待する。

自分とは異なる思いや価値観をもつ相手と英語でのコミュニケーションを繰り返す中で、自分の思いを「わかってもらおう」とすることと、相手の思いを「わかろう」とすることを大切に、「よりよいコミュニケーション」にせまることで、子どもたちは英語という言語を主体的に学び、多様な語彙を身につけたり、表現の幅を広げたりすることができる。